

No.19

May 31, 1991

Information

講 演

1990年12月10日（月）・第29回談話サロン（東京・弘済会館）

講師・題目

相 磯 秀 夫：慶應大学湘南藤沢キャンパスの開設
——そのねらいと特徴

日本工学アカデミー

THE ENGINEERING ACADEMY OF JAPAN

慶應大学湘南キャンパスの開設

——そのねらいと特徴——



相磯 秀夫

1932年3月生まれ
1955年3月 慶應義塾大学工学部電気工学科卒業
1957年3月 同大学院工学研究科電気工学専攻修士課程修了
1957年4月 大阪大学工学部助手
1957年10月 通産省工技院電気試験所（現電子技術総合研究所）技官
1968年9月 工学博士
1971年4月 慶應義塾大学工学部教授
1990年4月 慶應義塾大学環境情報学部長（現在に至る）

司会（戸田） では、ただいまから日本工学アカデミーの第29回の談話サロンを始めさせていただきます。

私、情報部会の幹事をやっております戸田と申します。

情報部会は小口さんが会長で、最近は産学協同の提案などを検討しているわけですが、その中の一つの結論として、産学協同をやっていくためには大学自体も研究を樹立されただけでなく、いかんかという結論になっておるわけですが、そういう検討の中できょうお話しいただきます慶應の湘南藤沢キャンパスというのはそういう方向で非常に挑戦的な新しい試みで、皆さんもご紹介するに値するんじゃないかということで、本日、慶應大学環境情報学部長の相磯先生においで願って、「湘南藤沢キャンパス（FSC）の開設—そのねらいと特徴—」ということでお話しをいただくことにしたわけです。

相磯先生、皆さん、よくご存知だと思いますが、簡単にご紹介させていただきますと、昭和32年に慶應大学工学部修士課程をご卒業になりまして、昭和32年に通産省の工技院の電気試験所に就職されました。46年に慶應大学の工学部の教授として

戻られまして、今年の4月に環境情報学部長に就任されて現在に至っております。

この間一貫してコンピュータのアーキテクチャの研究で全世界的に成果を上げられておりまして、第5世代コンピュータのプロジェクト、スーパーコンピュータのプロジェクト等でリーダーシップをとってこられたわけでございます。最近湘南藤沢キャンパスの開設につきまして指導的な役割を果たして開設されたわけでございますが、引き続き学部長として運営に当たっております。

簡単でございますが、ご紹介は以上にいたしまして、相磯先生のお話を伺いたいと思います。よろしく願いいたします。

相磯 皆さんこんばんは。きょうお招きいただきました慶應大学相磯秀夫でございます。

何か新しい学部 of 構想について話をするようにというご依頼をいただきました。私どもにとりましては、PRの絶好の場ですから、ぜひそうさせていただきますとお引き受けいたしました。しかし、後ほど出席者の名簿が参りまして、いや、大変な人がたくさんおられるので、文部省のヒアリングよりもずっと緊張します。特に、常日ごろよくご存じの方が多いためです。そういう点では、ほ

んとうにきょうはどうしたらいいかなと思ったくらいです。

しかし、これから少し時間をいただきまして、新しい学部の特徴をお話し申し上げたいと考えております。皆さんのお手元には非常に簡単な、OHPの一部コピーをお渡しいたしましたので、これを参照していただければ大変ありがたいと思います。

なお、まだたくさんありますので、もしご希望があれば、別の機会に、資料がございますので、お渡ししたいと考えております。ですから、この話を機会にしまして、どうぞご遠慮なく私どもの方に来ていただく、あるいは要求をしていただきたいと思いますと考えております。

お配りしました資料の一番最後のところ（説明資料：1及び2）が、実はきょうお話しをする要点を項目的にまとめたつもりなんです。後ほどそちらの方に移りますけれども、最初に、なぜ慶應義塾は新しい学部をつくったかという背景を簡単にお話し申し上げたいと考えております。

《新学部設立の背景》

ここに要点をまとめましたけれども、1つは、慶應義塾の歴史的な発展というのがあります。大変おもしろいことに慶應義塾は大体30年ぐらいのスパンで新しい学部ができています。ちょうど我々よりほぼ30年前に商学部ができましたし、その間に大学院ですけれども、ビジネススクールができています。商学部の前が工学部、その前が医学部と、大体二、三十年ごとにできているというのが実情です。多分、これは世の中の発展とともに新しい分野が必要だということを物語っているんだと思うんですけれども、慶應義塾の場合には塾内外で、もうこの辺でそろそろという話が出てきておりまして、ともかくどこかに新しい学部をつくったらどうかという話が前からあったようです。

もう一つは、これから高学歴社会で大学卒の人がたくさん増える。そのときに慶應義塾の役割というのが若干少なくなってくる。特に新しい分野が出てきときに慶應義塾の卒業生がいらないというのは寂しいという意見があります。もちろんその裏には21世紀に向けて、これは大義名分ですけれ

ども、大学を新しくしたい。したがって、湘南藤沢に投資することによって既存の学部もきっとよくなるに違いないということを考えました。これは意外とそういう面が最近出てきております。ほかの学部が刺激を受けてかなり変わってきているという面もありますので、これはある意味では既に効果が出てきているというわけです。

そのほかにも、最近、非常に地球規模の大きな問題がどんどん出てくる。その問題に対処しないといけない。そのためには、言うに及ばず国際的であり、かつ学際的な問題の解決のアプローチが必要で、1学部、あるいは既存の縦割りの個別学問だけではとてもだめだろうというわけで、学際的なアプローチをとろう。特に慶應義塾で欠けているところは、どうもこの辺の学際的なところではないだろうか。どんな新しい学部を作っても、国際化とか、情報化というのは当たり前ですから、新しい学部には、国際化とか、情報なんていう名前をつけるのはよそうという話がありました。結局、国際という名前は入りませんでした。しかし、情報を落としてしまいますと、ちょっと主体性がなくなってしまいますから、情報だけは結果的には残しました。

もう一つは、これからの教育というのは知識の伝承だけじゃなくて、自分で問題を発見し解決する、そういうような新しい教育研究というのをねらうべきではないだろうかということでスタートしました。

このディスカッションが具体的にスタートしたのは1986年の10月です。ですから、ちょうど4年前。学部スタートの3年半前に具体的なスタートをしました。これは各学部から三人ずつ出まして、そのほかに関係者を含めて二十二、三名で毎週1回、大体水曜日の夜集まってディスカッションをインテンシブに行いました。かんかんがくがく、私の立場ですと、これからの大学は最先端の科学技術がなければ一流の大学とは言えないということで、随分その辺を主張したんですけれども、慶應義塾の体質、特に財政的な理由でその辺が実現できませんでした。そういう点で、妥協案として、それでは情報ということで、学際的な情報というのをねらったつもりなんです。しかし、そ

れも当初のねらいよりもずっと妥協すべき点が多々ありまして、これからお話をするような学部になったといういきさつがあります。

もちろん1週間に一遍では時間的にとても間に合いませんで、土曜、日曜、祭日を返上して、合宿でインテンシブなディスカッションをよくやりました。したがって、かなりの人がかなりの時間をかけてこれを検討した。慶應義塾にとりましては世紀のプロジェクトでありまして、大学全体を挙げてこれだけディスカッションしたというのは珍しいのではないかというふうに思います。

《新学部の理念》

その結果、やっぱり理念というのが必要だろうということで、いろいろとこれをまとめたわけですが、簡単に言えば、1つは、これからの社会は人間が中心であり、それを取り巻く環境の整備というのがきつと重要になるに違いない。加えて、これからの社会は情報とか、知識が共通の資産、コモンプロパティ、現在で言えば、資本に対応し、匹敵するようなものになるに違いない。したがって、情報ということに力を入れよう。

それから、先ほど申し上げましたように、いろいろな意味で総合的な判断ができるということが大変重要だろうし、やはりグローバルで、国際的な見方というものも必要だろうと考えました。また、先ほどの問題発見解決型につながる独創性ということを尊重しようではないか。この5つの理念を何とかして実現しようというわけで、これからお話しするようなものになってきたわけです。

その結果、私どもは2つの学部ができ上がることになりました。総合政策学部と環境情報学部です。総合政策学部は加藤寛先生が学部長でございますが、言うなれば、個人のレベルから国家のレベルに至る、いろいろな立場、例えば一般市民もそうですし、ノンプロフィットなオーガナイゼーション、例えば大学もそうですし、当然、プロフィット中心の企業というものもありますが、そのようなところで、総合的に計画をし、かつ、意思決定をする。そのために必要なさまざまな勉強をしようというのがこの学部の背景です。したがって、学際性ということを言いますと、政治学、法学、

経済学、文化人類学のようなものを含めまして、比較的文系の総合的な学科ということが言えます。

環境情報学部は私が取りまとめをしておりますが、これからお話をするような性質を持った学部です。きょうは、環境情報学部に関連して少し詳しくお話を申し上げたいと思います。

《SFCの概要》

さて、そこで皆さんにお配りしましたテキストの、後ろの説明資料にスキップしていただきたいと思います。これはキャンパスの様子を示したのですが、ご存知だと思いますが、湘南の藤沢に約10万坪の土地を得ました。これは一番近い駅が小田急江ノ島線の湘南台駅で、ここから西へ3.5キロ。ちょっと歩くというわけにはいかないんですが、バスで15分ぐらい。それから、辻堂から大変いい道が通っておりまして、そこから北へ6.5キロということで、バスで25分。あの辺の人に言わせると、藤沢のチベットだとおっしゃっていらして、冬になると、辻堂の駅から見ても、大体5度ぐらいは低いよとおどかされております。そういう意味で閑静な、市街化調整区域ですから、周りに何も無いというようなところですよ。もともとは7万5,000坪ほどが相模鉄道の土地でございまして、それに藤沢市の協力で2万5,000坪買い足し、10万坪にしました。

これに隣接して、実は藤沢市がほぼ同じぐらいの面積を持っておりまして、将来はこれにドッキングして“健康と文化の森”と称する文化園をつくらうという計画があります。

総合政策学部と環境情報学部の現状ですが、各学部とも定員は400名ずつで、総合政策学部が564名、環境情報学部が591名の学生がいます。歩どまりの予測が全くつかないという状況で学生をとり過ぎてしまいました。総合政策学部は女子は約25%、環境情報学部はさらに多くて、女子は33%ということです。

ご存知だと思いますけれども、こんなにたくさん学生をとってしまいますと、文部省から見ると、水増しではないだろうかということになります。もしそうだとすると、私学助成金はカットされますので、これはなかなか厳しいことになります。

しかし、入学手続きの予測がつかなかったという事実を了解いただきました。

現時点では約半分のフルタイムの先生が見えております。あと2年間で倍になるというところです。外国人は最近もう少し増えましたが、これはネイティブスピーカーで、主に外国語の教育をする方です。

添付の説明資料1には入学試験の応募者の数が書いてあります。とにかく非常にたくさんの方が応募されたということです。後でお話をしますが、アドミッションオフィスの入学試験というようなものがあって、新しい試みをしています。

添付の説明資料2に従って少しお話を申し上げたほうがいいのではないかと考えています。

最初は、諸学科横断的なアプローチと書いてあります。先ほど申し上げましたように、総合政策学部はお話を申し上げたとおりですが、環境情報に関連してもそうです。

《環境情報学部》

そこで、先に環境情報って何だろうかということをお話し申し上げます。ここにおられる方はそうではないと思うんですが、最初は、10人中10人、環境情報学部は公害の勉強をするんですかと問い返してきました。確かに最近のマスコミを初め、新聞雑誌を見れば、環境イコール自然環境、地球環境というふうにとれるわけです。実は、環境情報学部に関連しまして、文部省側でもこの言葉は変えてくれと言われたくらいなんです。文部省側も自然環境、地球環境というところに非常に意味を置いていたと思うんです。これは極めてナチュラルだと思うんです。しかし、実際には環境とは、“人間とか、動植物、機械など広義のシステムが、その中に含まれる情報を介して、認知あるいは知覚する外界”の総称と定義されているのです。これからは環境というのは天から与えられた、自然環境、地球環境はもちろんですが、いろいろ新しい環境というのがあるんですよというわけです。

例えばどういうことを言っているかというと、自然環境、地球環境は天から与えられたような環境ですね。その上に生きる人間を取りまく人間環

境、そして、人間が生活する空間の環境ともいうべき生活環境もあるでしょう。人間や動植物らがまたグループになって組織環境を造り、社会環境を創造します。それから、私がこれからお話を申し上げたいのは、それに加えて最近情報は情報や先端技術によって新しい環境づくりをしよう、あるいは人工的に環境をつくろうというわけで、情報環境や、人工環境というのが考えられます。我々も日常生活で、例えば家庭環境ともいえますし、キャンパス環境、プログラミング環境、オフィス環境ということがあります。したがって、環境という言葉の頭に何か名詞をつけると、その名詞に関連した特定の場合ができ上がります。そういうことを考えますと、自然環境だけではないんだということを書部省側に納得をしていただいたといういきさつがあります。

そういう意味で、実は環境というのは、非常に広くとらえるということを私どもはしております。情報は定義するまでもありません。むしろ情報というのは定義が大変しづらくて、定義ができないくらいなんですけれども、環境をどういうふうに認知するかといえば、当然、その中の情報を介して認知するわけですから、見方によれば、環境＝情報と見ることもできます。そういうことを考えると、環境というのは一言で言えば、人間の身の回りすべてとお考えいただき、我々の学部で対象にするものは何かということ、人間と人間を取りまく環境とそれらに密接な関係がある情報とのかかわり合いをきちっと理解しよう、というのが新学部の狙いです。

また、これからの社会ではいろいろな意味で新しい環境をデザインするんだという立場が大変重要になります。環境デザインの時代にも対応したいと考えています。

私どもは高度情報社会が間もなく21世紀には成熟するだろうと思いますけれども、その後にどんな社会が来るんだろうかということを考えているわけです。つまり、ポスト高度情報社会は高度環境社会であるに違いないと思っています。最近では生活重視型社会とか、人間や環境にやさしい社会とかという言葉を使いますが、私は学生にはきっと高度環境社会が来るに違いないと言っ

ています。しかし、学生には、豊かな社会が情報とか、あるいは環境だけで保障されるものではない。豊かな社会のインフラストラクチャーはあくまでも第1次産業であり、第2次産業、つまり農業であり、工業なんだ、それを活性化し、かつ有効に活用するために情報が必要であり、その上に豊かな環境のデザインが意味をもってくるんだということを注意しています。いずれにしても、こういう新しいとらえ方をしたいというのが環境情報学部背景です。

《カリキュラム》

私どもは、カリキュラムの設定に関連しましては、一応、大学院大学を想定し、大学院からおろすという格好をとりました。したがって、文部省側から見ると、この学部は大学院に見えたようです。

文部省のヒアリングでも新学部的一般教養が従来の一般教養と大分違うように見えたようですが、私どもの一般教養は将来のために役立つようなユニークな一般教養を設定しました。つまり、普通のナレッジマインドの、あるいはソーシャルマインドを育成するための科目、いろいろな意味でアナリシスマインド、例えば数学などの科目、法律などのリーガルマインド科目、それから会計などのアカウンティングマインドの科目というふうに設定されています。最近是一般教養のあり方に関するディスカッションが文部省の中で盛んなんだそうですが、文部省側も湘南藤沢の一般教養が一番いいんだということを言っているんだそうです。

総合政策学部の中には3つのコースがあります。政策管理コースは地方から中央の行政に至る政府関係のポリシープランニングとディシジョンメイキングを勉強し、社会経営コースはノンプロフィットからプロフィットのいろいろなレベルの経営に関しての勉強、国際政策コースは、これは言うに及ばず国際的な政策論を勉強するものだというふうにお考えください。環境情報学部にも3つのコースがあります。一つは知識環境コースです。これからはどんな分野でも知識の再構成と構築のために知識環境を整えていくことが重要になります。2つ目は、人間の周りの環境、つまり人間環境コー

スです。これは究極的には高度情報社会のデザインに関係するんだろうと思います。3つ目は、メディア環境コースですが、さまざまなメディアの情報を通して世の中や物の考え方がどう変わるだろうかということを中心にしたものです。この中にはコンピュータミュージックとか、コンピュータアートなどの非常に新しいメディアの勉強が入っております。将来のメディア産業、あるいは知識産業のようなところが相当変わるに違いないということで、思い切った方向を打ち出したつもりなんです。

《SFCの新しい試み》

ここで新学部の特徴のいくつかをご紹介しますと思います。

その1つは、学期制度です。私どもはセメスター制をとっておりまして、通年というのはございません。つまり9月入学がございます。帰国子女、留学生だけを対象にしますけれども、9月入学がございますから全部セメスター制で授業をします。もちろん経済学などは4単位で通年なんですけれども、半分はマクロ経済、半分はミクロ経済を教え、どのセメスターからとってもいいようになっています。したがって、9月卒業もあるわけです。

もう一つ、大変おもしろいのに、入学試験制度があります。入試は大変難しい問題で、これをドラマチックに変えるなんていいわけには、日本の社会ではできません。したがって、窓口を広くしようよということになりました。具体的には、一般の入試は英語または数学、それに、小論文の2科目だけです。今年は英語で受けた人は70%、数学が30%ですが、今年の春学期、秋学期といいますが、春学期の成績を英語グループと数学グループと見ますと、一般教養の段階ではほとんど変わりがありません。

もう一つおもしろいのがあります。それはアドミッションオフィス入学試験(AO入試)といえます。アドミッションオフィスというのは、入学の相談窓口です。一年中アドミッションオフィスはオープンしていて、いつでも相談に来なさいという格好になっています。

このAO入試というのは自己推薦なんです。

普通推薦入学といいますと、慶應のほうから高校を指定して、そこから校長先生が推薦をするという格好をとります。しかしAO入試はそういう格好をとりません。全部自分で推薦します。そのかわり条件があります。条件の1つは、成績は4.0以上。2つ目は一能または一芸があることを証明することです。すごく成績がよいのも一能です。それから、学芸に才ある人、英語のチャーチル杯に優勝した学生、社会奉仕あるいは社会活動した人、スポーツで優秀な成績を残した学生もいます。今年度はPRが十分できていませんでしたが、応募者がちょうど300人いまして、その中から30人取りました。

アドミッションオフィスは、一年中開いていて、いつでも受付はしますが、一年中入学を許可するわけではありません。7月は帰国子女と留学生、9月と12月は一般学生を、1月は留学生を対象にして、まとめて選考をします。今年度の実績は約10倍ぐらいの競争率です。自己推薦は自信のある人が来ますから、すごくいいんです。実際に春学期の成績を見ますと自己推薦組はいい成績を残しています。

カリキュラムは、かなり思い切った作り方をしました。実際にカリキュラムは3つのグループに分かれています。いろいろな問題を把握するために必要な学問、その問題を解析するために必要な学問、その結果を生かす、つまり、設計をするための学問に分かれています。その中身はコンピュータミュージックや、コンピュータアートを含めて様々な科目が準備されています。担当の先生も経済学者、社会学者、言語学者、心理学者、計算機科学者、数理学者、医者、芸術家など多分野から参加しています。

授業は、新しい学問分野ということもありまして、隣の人がどんな授業をしているかわからないというじゃ困るというわけで、各先生は、約2時間かけまして、教職員の前でどういう授業をするかというプレゼンテーションをさせます。私も2時間半にわたり、環境情報学とは何かというのをやったわけです。それに対してみんな注文をつけ、調整をし、ここはこうしてくれ、ああしてくれ、あげくの果ては、あなたは声が小さいとか、ある

いはOHPの作り方について、いろいろな注文をつけます。これは義務として全員やることになっています。したがって、どんな人が何を教えようとしているかというのがわかるようになっています。

その結果、授業内容のシラバスができますから、学期の初めに学生に配ります。自分はワンセメスター15週間にわたってそれぞれのところでどういう授業をするか、参考書は何であるかということをもっと学生に知らせるわけです。シラバスの作り方には個人差がございしますが、大変おもしろいシラバスができ上がります。

時間割は、朝は9時半始まりで作っています。お昼休みという考え方はありません。お昼休み中も授業をやっております。したがって、学生は、大体1週間のうち2日間ぐらいは、12時には食事がとれないということになっておりますけれども、あまり問題になっていません。そのかわりお昼でもちゃんと事務もあいているという体制をとっています。ですから、いつでも学生と応対はできるという格好で、絶対に休講というのはありません。必ず補講することになっています。私どもは、土曜日は原則として授業はありません。学生は土曜日にほかのキャンパスの学生とつき合うことを勧めています。ときには土曜日を補講に使う、あるいは外来の先生方でどうしてもという方には土曜日に授業をしていただくという格好になっております。

授業の最後には、学生による授業評価を行うことにしています。これが実におもしろいんです。13項目にわたり、1学期間の授業の評価をします。例えば、授業内容が体系的であったかどうか、ほかの学生に勧めたいかどうか、OHPの使い方は上手であったかどうかなどを問い合わせします。その結果は集計され、統計処理され、教職員に戻されます。もちろんその結果は人事の査定に使わないという約束で、全部オープンです。どうして評価がいいのか、なぜ悪いのか、というのをみんなでもっと集まってディスカッションをするという会も持ちました。

学生による授業評価は先生にとっては厳しいものですが、大変おもしろい結果を示しています。

授業をほかの学生に勧めたいかどうかに関して、

授業の経験年数から見てみますと、授業の経験がない初めての人、5年未満の人、10年未満の人、10年以上の人の評価はだんだん悪くなることを示しています。年齢別に見ましても、若い先生は評判はいいようです。年寄り、特に45才から10年間ぐらいは悪いんです。一般に多忙で授業が雑になっちゃっているんじゃないかと思います。さらに年をとると少しよくなるという感じはします。

私どもの新しい学部の特徴の一つは、自然言語の教育です。私どもが勉強した時分から見ましたら理想に近い教育をしているという感じがします。先生方は全員バイリンガルです。英語を例にとりますと、専任が日本人で、全部で10人いますけど、9人は Ph. D です。ということは、アメリカとかイギリスで学位を取ったという方です。外国語は英語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、マレー・インドネシア語、それから日本語。間もなくスペイン語とロシア語が入る予定です。

この教育が非常にユニークです。まず高校と大学は違うんだというわけで、最初の春学期は実際に語学の教育はしません。つまり、英語ですと、すぐにシェークスピアのようなものをやり出しますが、そういうことはしない。どうするかというと、諸国語概説といいまして、ゴールデンウィークの頃から夏休みまでの間、それぞれの外国語のイントロダクションをすることになっているんです。そのイントロダクションを通して、少なくとも第一外国語は確実に身につけること、自分の意思がちゃんと表現できるというところまで実力をつけることを学生に確認させます。英語でいいますと、2年間で TOEFL の550点ぐらいを目指します。そのとき例えば私が英語を教えて、私の試験にパスしても意味はありません。第三者の評価を尊重するということになっています。授業は日本人の専任とネイティブスピーカーがペアで教え、TA と自動学習システムでその授業を補います。2年間のインテンシブコースの後には、キャリアプログラムというのがあります。例えば英文学コースとか、翻訳コース、通訳コース、英会話コースなどがありますから、それを選択できるようになっています。

特にインテンシブコースというのは、英語に関

して言いますと、低レベルクラスとすばらしいクラスとの間が5つに分かれています。

春学期の終りに一応テストしまして、どのクラスに入れるかを決めます。英語をとりたいという学生は999名。ですから、1155名ほとんどが英語の履修を希望していましたが、諸外国語概説が終わった時点での希望者は639名に減りました。外国語のクラスは30人単位ですが、英語以外の外国語クラスも定員オーバーの希望者が出て、バランスのよいクラス分けができました。これも諸学国語概説のおかげです。

実は毎週それぞれの言語に関する週間をつくりました。今週は朝鮮語ウィークですよ、次週は英語ウィークといった具合です。例えば、朝鮮語ウィークでは、朝鮮語に関連したいろいろな解説をするんです。今回は、東京大学の佐藤誠三郎先生が朝鮮の政治、私どもの経済学部長の鳥居先生が朝鮮の経済の話をしました。現地語の映画も見せました。そのほかに OB がやってきまして、自分の韓国の体験を紹介してくれました。朝鮮語担当の先生は大変教育熱心な女子教授で、わざわざソウルからキムチとか、ラーメンとか、おもちを取り寄せ学生にサービスをしました。それから、ささやかですけど、食堂には朝鮮の料理を出してもらい、バックグラウンドミュージックは朝鮮の音楽を流しました。

そういうふうにして1週間過ごすわけです。そうすると、学生はそれぞれの外国語の重要性がよく理解できるわけです。その結果、クラス分けがうまくいったわけです。

私どもは第一外国語はインテンシブで徹底的に絞りますけれども、第二外国語は必ずしもインテンシブではありません。したがって、読み書きは少なくとも勉強するし、その言語の文化的背景のようなものは理解できると思います。第一外国語としてヨーロッパ系の外国語をとった人は第二外国語は必ず非ヨーロッパ系、つまり、アジアの言葉を取りなさいと指導しています。私どもはアジアの言葉を重視しているとお考えいただければいいかと思います。

《情報リテラシー》

2つ目の特徴は、当然のことながら自然言語に對比して人工言語という言葉をつくりましたが、情報に関する考え方です。実は、最初からプログラミングをやるべきではないというのが私の主張なんです。目的意識のないところで難しいことをやってもすぐに嫌になってしまうということで、私はリテラシー論というのを打って出しました。情報のリテラシー、つまり、これは簡単に言えば“情報の読み書きそろばん”です。昔、福沢諭吉は『学問のすずめ』で、“読み書きそろばん”が万人に必要なだということをいうわけですけども、私はそれに加えて、これからは“情報の読み書きそろばん”、すなわち“情報リテラシー”が必要と考えています。リテラシーは、基本知識、あるいは基本技能という意味ですけども、それを身につけなきゃいけないと思っています。コンピュータありきで教育はできません。これからはまずリテラシーが必要です。そのリテラシーは何かといったらワークステーションはだれでも使えるということで、例えばキーボードのオペレーションは1週間教育しました。日本人はキーボードが苦手だというけれど、それは当たっていないと私は思います。今の学生はほとんど難なくキーボードを使いこなしているという感じです。もちろん、そのほかにもフロッピーとか、ネットワークとかの社会的な意味合いは教えます。電子メールが打てることも必要です。したがって、学生、教職員は、全員メールボックスを持っています。したがって、メールボックスを介してメッセージを送る。長けた学生になりますと、アメリカの大学の友達にどんどんメールを送っている人がいます。語学の先生などは、ちょっとしたクイズの答を電子メールで出させるということをしています。

もちろんこういうことができるようになりますと、いろいろな問題も起こることは事実です。例えば電子メールを最初に教わりますと、途端に、だれかに電子メールを打ってみようということになり、学部長の私のところにメールがどどっと来て、それを読むのに2時間ぐらいかかり、返事を出すのに更に2時間ぐらいかかる。ちょっと勘弁

してほしいというようなことにもなります。また、不幸の手紙、チェーンドレターが出てくる可能性もあります。要するに、学生は罪の意識はないんですが、いたずらをするということにもなる。やっぱりあたらしい社会問題がこういうところに出てきます。

3つ目はドキュメントプロセッシング。私はワープロはすでに卒業したと思っています。むしろ企業は企業、大学は大学のドキュメンテーションということをもう一回原点に戻って考えるべきと主張しています。そういう意味で、私どもは大学用のドキュメンテーションプロセッサとして有名な“スタンフォード大学のTEX”を使いました。実際には日本語LATEXを使っています。

4つ目は、統計ソフトウェアに代表されるように、使いやすいパッケージソフトウェアを上手に使うことです。

5つ目は、学術情報センターを初めとした図書情報のアクセスが自分のワークステーションからできるようにすることです。

6つ目は、日経ニーズとか、統計局のデータとか、国連のデータベースなどの商用データベースをアクセスし、活用することです。その活用には統計が必要です。私は統計の基礎というのはどんな学生にも要るんだと考えています。コンピュータシステムは24時間オープンです。いつでも使えるという格好になっています。学生は最初に登録料として1万円払いますと、ワークステーションに関しては全部無料です。それから、レーザープリンタを使ったプリントは、500枚までは無料です。それ以上は一応課金をするという格好になっています。今のところファイルは十分ありますから、ファイルに対してお金を取るということはありません。学生が増えますとどうなるか、これからの課題だろうと思っています。

《高度情報技術》

こんなふうにして、まずともかくリテラシーを身につける。しかし、実際には高度な技術が我々の学部では必要ですから、プログラミングの手法とか、自分の知識ベースの構築ができるようにしてほしいと思っています。そのためにはプログラ

ミングも必要でしょうし、人工知能とか、自然言語処理のようなものも必要になるでしょう。プログラミングは、私どもは Fortran、Cobol は一切やっておりません。必要なら、TA 並びに自習用のプログラムがありますから、自分で勉強するという格好を取っております。実際は、Pascal を教え、ストラクチャードプログラミングとか、プログラムの構造を教えています。これが終わりましたら、オブジェクト指向の物の考え方を教えるつもりです。したがって、例えば Smalltalk-80 などを使うことになると思います。そのほかには、C、Modula、Ada、Lisp、Prolog、シミュレーション言語、GKS などが選択できるようになっています。これは2年でやりますが、最終的には、私は自分の知識ベースぐらいは構築できるようにしてほしいと思っています。

《リテラシーの教育効果》

今までの実績から言えることは、私は情報リテラシーを教えてほんとうによかったと思っています。この夏に英語のインテンシブコースがスタンフォード大学で開かれ、日本の有名私立大学の学生が参加しましたが、スタンフォード大学のコンピュータファシリティを使えたのは SFC の16人の学生だけだったそうです。その結果、SFC の学生は、非常にアグレッシブな活動をし、高い評価を受けました。

本来はもっと早い時期に情報リテラシーの学習をやるべきだと思うんですが、日本の実情ですと、ちょうど大学の1年生ぐらいがいいんじゃないかと思っています。学生に聞きますと、最初は“コンピュータは思ったよりおもしろい”というのと、“案外易しいんですね”というんですね。プログラミングの苦勞を知らないからなんです。今は大変だと思われていますが、意外と喜んでコンピュータを使っており、大変よかったと私は思っています。情報リテラシーの教育のためには、従来のようなコンピュータシステムではだめで、自分の仕事はワークステーションとか、高機能端末、ラップトップコンピュータで処理できる分散型システムにすべきです。

《SFC ネットワーク》

将来は衛星通信の機能を活用することも大切です。衛星放送による生きた外国語教育、キャンパス間通信、広域ネットワークとして重要な役割を果たすことになります。現状のコンピュータシステムは、約300台の教育用のワークステーション、約200台の研究用ワークステーションが接続されています。学生の約70%は自分のラップトップコンピュータをもっており、自分の家からも一年中コンピュータシステムが使えるようになっています。実はラップトップコンピュータに関しては、3年ぐらい前から各社を歩きまして、ぜひ学生用のラップトップコンピュータを開発してくれるよう要請しました。これからはワークステーションの時代で、ワークステーションの時代になると大学のマーケットは大きいことを説得しました。アメリカではコンピュータに関して、大学を制したところが勝つという一つのビジネスフィロソフィーがあります。かつての IBM、DEC、サンマイクロ、次はどこの会社がとるかということが話題になっているほどです。大学のマーケットは大きく、永遠で、しかも、後の影響が非常に大きいといわれています。ワークステーションの時代になればなるほど、大学は重要になるでしょう。1人1台、つまり情報のパーソナル化がどんどん進んで、大学では学生は1人1台ラップトップコンピュータ、企業では1人1台ワークステーションということになるに違いないと思います。

そんなような意味で、どこからでもワークステーションやラップトップコンピュータがつながるように1,700カ所のコンセントをビルディング内に分散し、配置しております。

その他の新学部の特徴を簡単に紹介しますと、アドバイザリーグループといい、1人の先生に20人ぐらいの学生をつけて、いろいろ相談に乗る、チューターシステムをもっています。このグループが集まり、フレッシュマンキャンプなどを楽しんでいます。また、オフィスパワーというのを決めておきまして、何曜日の何時から何時までは必ず自分のオフィスにいるから、だれでも訪問できるようオフィスをオープンしています。キャンパ

スライフ委員会というのがあり、キャンパスの運営、地域社会との関係の改善に努めています。さらにこれからは勉強だけでなく、健全な精神と健康を養うことも必要ですから、心身ウェルネスセンターというのを設けていろいろ相談に乗るということもやっています。

きょう、時間がありませんので、お話することはできませんが、産学協同の研究所構想もあります。私は研究コンソシアム以外に大学を活性化し、近代化する方法はないと思っています。これは別の機会にも述べたんですけども、現在3つの研究所ができております。総合政策研究所、環境情報研究所、言語コミュニケーション研究所というのをつくりました。そこで健全な産官学協同の研究開発を行っていきたいと考えています。

駆け足になってしまい、取りとめのない話になってしまいましたが、新学部の幾つかの特徴をお話したつもりです。ありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。

大変野心的な試みと実績を情熱を持って語っていただきました。

早速質問のほうがよくしんですが、談話サロンのしきたりのようでございまして、食事の時間をとってから質問をするということになっておるようでございますので、10分ぐらい食事をしていただいて、その後にディスカッションをやりたいと思います。しばらく食事のほうをお願いいたします。

(休憩)

司会 まだお食事中の方もいらっしゃるかもしれませんが、時間がございませんで、相磯先生はよろしいとおっしゃるので、質問を始めさせていただきますと思います。お食事中の方は引き続きお食事をお願いしたいと思いますが、どうぞ手を挙げて先生にご質問お願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

質問 先生のお話を伺っていると、我々、業界における者は、やはり大学というのが基礎を教えるということと、もっと業界に出て役に立つことを教える、こういう2つの問題があると思うんですけども、すぐ役に立つということに関しては非常に立派な教育でいいと思っているんですけども、基礎的なことを教えることに関係しては、

語学なんかは基礎になるかもしれませんが、そういう意味ではそれはそれでいいんだと思いますけれども、これもある意味で役に立つということにつながるんだと思うんです。そういうことに関係してどういうふうにお考えになっているかということが1つ。

それからついでに言わせていただきますけど、先生ご自身は大変忙しいのかどうか。今のお話を伺っていると大分お忙しいようなんですけども、先生も耐えられないほど忙しいとやっぱりうまくいなくなっちゃう感じがありますし、45歳から55歳ですか、あの辺があまりよくないというのはどういうところから来ているのかということがありまして、その辺のことに關してのお話を伺いたい。

3つ目としては、研究のことをおっしゃいましたが、従来の大学というのは教育と研究という2本柱でやっていた。そのことに関して研究の話はなかったもので、いろいろお考えはあるんでしょうけど、そのことに関してはどういうふうにお考えになっているか。その辺を伺いたいと思います。

相磯 第1点は、やはり大学は基礎を勉強しろというお話かと思うんですが、おっしゃるとおり、文部省側からもこの学部は大学院ではないか、もう少し基礎をきちっとしたほうがいいのかという話が実際には出ております。さっきのリテラシーのようなものは最初の常識ですが、それだけで終わってしまいますと専門学校と同じですから、私どももその辺はわきまえているつもりです。私どもは大学院へ行くのは当たり前だという前提のもとで考えております。専門教育のところではわりあい専門の基礎を集中的にやろうということになっております。でも、さっき言ったような理由では文部省側の質問も、これはもう大学院ベースではないだろうか、ほかの知識をまず得てからこのコースに入るのが一番いいのではないかと、質問を受けました。それに対して我々もそれはわからないわけではないんですけども、むしろ新しい学問分野をつくるつもりで挑戦をしています。ひょっとしたら失敗するかもしれませんが、失敗をおそれずに新しい試みを行っ

ています。新設2学部は、古い学部のしがらみがないものですから、とにかく新しいおもしろそうなことは全部やってみようというわけです。ですけど、おっしゃるとおり、基礎は最も重要で、むしろ大学のこれからの役割というのは、基礎というところが重点になるだろうということは心得ているつもりです。ですから、専門の、特に3年生のところでは、もう一度専門分野に関連して基礎を勉強させるつもりです。あとは大学院へ行ってからその応用を勉強させるつもりです。今の予定では、大学院は半分ぐらいは行くということを前提にしているつもりでいます。

第2点目は、先生は忙しいかというご質問ですが、実はこの講義カリキュラムで新しいことをやりますと、非常に忙しいです。私どもはかつては理工学部ですから、昔から毎日のように大学へ行っているんですが、文化系の先生は、必ずしもそうではなくて、かなり大学に行く日は少ないようにかつては思われたんですけども、今度の学部はそういうことにはなりません。大学の義務以外の仕事は全て許可制をとっています。むしろ、できるだけ学生と接するようにしています。そういう点で忙しいのではないかなと思うんですが、研究ができないというわけじゃなくて、最近、やっと研究、コンソシアム的なグループができるようになってきました。今まではゼロからの出発ですから、大変忙しい思いをしましたが、本格的な研究活動も動き出しました。

第3点目は、研究は産学協同を中心に展開したいと思っています。ですから、そのためには健全なコンソシアム体制をつくらないといけないということで、研究マネジメントの重要性を相当考えているつもりです。

質問 いや、結構でございます。研究の場合は、まだこれからなのかもしれませんが、教育が大変忙しいと研究まで手が回らないということが起こりかねないんですけど……。

相磯 しかし、私どものところは、授業の負担は非常に楽でして、普通1~2コマ（1コマは1週間に90分）しか持っていません。もちろんそのうちにゼミを持ちますと、また忙しくなるかもしれませんが、それは研究の一端といえるでしょう。

質問 ありがとうございました。

質問 変な質問ですが、学位はどういう学位を……。学部、それから、大学院ですね。

相磯 学位は、文系か理系かわからないということで大変もめました。結局、文部省側との折衝で、私は情報学を出してくれと言ったんですが、その学士号は現在ありません。今、臨教審で話題になっていますように、農学士とか、工学士とか、理学士というのは二十幾つある。学位制度が変わる可能性があります。そのために学士号を増やすのは反対だというわけで、今のところは社会科学ということになっています。やがて、学士号は〇〇大学学士（×××）という単純な形になると思われます。×××には何を書いてもよく、情報学と書けます。

質問 学士は大体学科名でいいことになりそうですね。博士はほんとうに基礎学問分野ということで随分絞られている。

質問 3つぐらい伺いたいと思うんですが、まず、その前に先生のお話で非常に明るいというか、希望の持てるお話を伺ったと思います。

日本の大学が非常に変わろうとしている方向の中で先端的なお話だったと思うんですが、伺ってみたいのは、先生方の中ではペアレビューに近いことはやっておられるのかどうかという感じのことが1つでございます。今度のセルフスタディーというか、自己申告、判断をすることの中でいろいろな項目がたくさん出ていますが、だれが何をやるのかよくわかりませんので、そういう意味ではペアレビューが学校の中であるかどうかというのが1つ伺ってみたい。

2つ目は、学生が習得すべき高度情報技術ということがここにあるわけですけど、先生方は一体どうなのか。（笑）何十人かの先生方がおられて、それぞれ教えられるわけですが、例えばプログラミング手法の中で一般と書いてあるところ、あるいはシステムとか、その辺のところをどのくらい先生は心得て、教えられるときに——ご専門の先生はもちろんそうだと思うんですけど、そうでないと、どういうことが起こるかということ、学生がコンピュータで教わることと、実際に先生方から教わるのが違っちゃって、コンピュータのない

時代のこういうものでも間に合っちゃ先生方がおられるかもしれないですね。そうすると、そういうのとのつながりをどういうふうに考えておられるかということが2つ目でございます。

3つ目は、企業側の人が、今まで先生のいろいろなお話の中に、先生の学校はそういう意味では大変立派な方がたくさん出ておられるわけですが、そういう方のご意見が定期的に反映されていくような組織になっているのだろうか、どうだろうか。大変欲張ったことを伺うわけでございますが、よろしくお願いします。

相磯 第1点は自分の評価、自己評価だと思いますけれども、現時点ではございません。今、その辺は必要と思いますが、どうしたらいいのか、まだ検討はしておりません。少なくともこの4年間は文部省の規定によって人事も動かすことはできません。ですから、この4年間をかけてその辺は整理をしていきたいと思っています。4年間は新しい人も採用できない、昇格もできないという状況になっています。能力評価は確かに大きな問題だと思います。

第2点は、先生のほうの情報の教育はどうかということですが、これは大変おもしろいことになっております。ワークステーションは各先生、全員1台ずつもらえることになっています。関心のない先生はまだ使っていません。しかし、最近、学生側からの突き上げが厳しくて、つまり、学生側は電子メールでどんどん質問をしてくるわけですから、今まで全く関心なかった人が、私のワークステーションはどうなったんですかなんていうふうになってきています。そのために、年寄りの先生への教育が手間がかかります。

それから、私は環境情報学という新しい授業をやっていますが、授業で図面や、OHPを使います。OHPを使いますと、どうしてもスピードが上がりますから、学生はノートをとるのは大変です。普通ですと、ハンズアウトをつくって学生に渡しますが、学生が多いものですから、私は自分のファイルの上にそれを乗せ、それを学生にオープンしています。学生は必要に応じて自分でコピーし授業にのぞみます。これは一つの新しい教材のつくり方なんです。今は、図面が入らないような状況

なものですから、図面だけは前もってプリントしてあげるようにしております。

それから、アート関係の人はビデオを使ったり、いろいろな視聴覚装置を使いますから、今までと大分違った設備も必要です。

ただ、先生には今まで電子メールも打ったことがない、ワープロも使ったことがない人がいますから、戸惑ってしまいまして、ぜひ先生のための授業といいますか、講習をやってほしいという要望があります。実際に、そのための講習会を定期的に行っています。

第3点は外からの意見を聞くかということですが、現時点では、あまりありません。この4月から実はSFCフォーラムという組織をつくりまして、外部の人の意見や情報交換を行う機会を年5回ぐらい持とうという話が出ております。これは多分実現するだろうと思います。これはオープンですから、もしご興味があれば参加をしていただければ大変ありがたいと思います。

質問 今年の夏にイリノイの室賀さんのところに行ったんですね。そうしたら、コンピュータサイエンスの学生がどんどん減っているというんですね、室賀さんのところの。それはなぜかという高校でコンピュータリテラシーは卒業しちゃって、もうコンピュータは要らない(笑)、だから、コンピュータサイエンスなんか嫌だと。ろくな学生が来ないから、あんまり質の悪いのはとれませんか、学生数が減っていると。現に減っているんですね。それからまた大学院に上がってくるのも減ると。それで、彼は非常に悩んでいましたけどね。日本はアメリカより大分おくらえていますから、そういうふうにはなかなかならないと思いますが、将来は、コンピュータリテラシーというのは高校で卒業してきちゃうんじゃないかという気がしましたね。

相磯 私もしゃしてほしいと思うんですね。でも、今の受験の体制ではそういうふうにはならないだろうというのが私の意見なんです。情報リテラシーの教育はちょうど1年生の最初がいいのではと私は思っています。

米国ではコンピュータサイエンスの学生が減ってきているといいますが、日本でも理工系への進

学者が少し減っているという実情もあるようです。その逆に私どものような新分野が盛んなのはその表れでしょう。その善し悪しは大変難しいところで、先に私が申しあげましたように、豊かな社会のインフラストラクチャーは農業であり、工業なんだということを若い学生に周知徹底させるべきだと思います。この辺を、理解させるための努力は何らかの格好でしないといけないんじゃないかと私は思うんです。

もう一つ、ご紹介申し上げたいことがあるんです。それは、先ほど申しあげましたように、女子学生が多いわけです。最近の女子学生の成績を見ると、圧倒的に上位です。やっぱりよく勉強するし、最近の女子を見てみると、むしろ、男子学生よりも思い切った行動をされます。非常にそういう点では頼もしい存在になっています。

最近私の友人の外国人には、これからは、あなたたちは日本のウーマンパワーと戦うのですよ。手ごわいですよ。これは秘密兵器なんだからと冗談をいっています。私はそうなるんじゃないかと思っています。企業の皆さん方もその辺をお考えいただくと非常にいいんじゃないかと思っています。

質問 採用している女子社員のほうが男子社員よりはるかに活発です。

相磯 そうなんです。学生もそうです。

質問 非常に頼もしいですね。

相磯 ですから、女子学生が3割を超えたら、本当に女子の天下になっちゃうんじゃないかな。(笑)

質問 きょうは大変いいお話を、世の中のニーズに合って、しかも非常に斬新な創意工夫をなさった、さすが相磯先生だと感銘を深くさせていただいたわけですが、1つ伺いたいのは、学部の名前でございますけれども、先ほど情報環境とする場合には自然環境に対して情報環境と、非常に分かりやすいんですね。その場合の2つ並べてある場合は形容詞、つまり、情報的環境とか、非常に分かりやすい。逆に環境情報といった場合は、環境側の情報なのか、環境的情報なのか、日本語の言葉としてどちらでございましょうか。

相磯 英語でいえばよくおわかりになると思いますけれども、実はこの辺についても、スタンフォ

ードの先生とか、MITの先生にも意見を聞きました。その結果、“Faculty of Environmental Information”と名付けました。情報を強調したつもりです。

質問 環境的情報と、こういうことですね。

相磯 スタンフォード大学にもニューヨーク大学にも、エンバイロメンタル・サイエンスというのがあります。これは情報もある程度入っているんですけども、あまり積極的にとらえていません。これからは情報との関係でその辺の展開がされると考え、私どもにはエンバイロメンタル・インフォメーションという名前にさせていただきました。

質問 ありがとうございます。

質問 私、早稲田大学におけるもので、大変今度、慶應の計画、前から気になっておりました。(笑)やはり私学として特徴のあることをなされた。しかも、1年たっていろいろその結果についてお話しいただきまして、大変参考になりまして、ありがとうございます。まずもってその勇気というか、それに対して敬意をあらわすのみでございます。

ちょっと申し上げたいのは、教員として気になりますのが、やはりスタッフの問題でございまして、このような人数で4年まいます。そうしますと、非常勤講師みたいな方をかなりフルに使わないとやっていけないと思うのでございますが、その辺、私どもなかなか非常勤講師を多くとることが私学としてできないということがございんですけど、その辺、伺いたいというのが1つ。

それから、私感銘いたしましたのは、語学にいたしましても、コンピュータ関係、情報関係にしても、最初にフレッシュマンのときにやる気持ちを持たせるんじゃないかな、そうすると、自然に学生たちが自分でエキサイトして勉強意識が出るということで、私、大変いいあれじゃないかなと思っておるわけでございます。ただ、この場合に、大体マスターぐらいまでの6年制みたいなことをお考えになっておられるんでしょうか。それとも4年で修了されるというところでやるか、その辺ちょっとご意見を伺いたい。

相磯 第1点は、スタッフはどうかというわけですが、現在は、50%ぐらいのスタッフで教育し

ています。あとその倍が、専門教育のために参加されます。先ほど申し上げましたように、例えば語学は30人クラス、コンピュータは40人クラスで授業をやりますから、学生をたくさんとり過ぎた結果、クラスを増やさないといけない、先生が足りないということになりました。ところが、文部省の認可の問題があって、専任を増やすわけにはいかない。また教育の質を落とすわけにもいきませんので、文部省の認可を得て、多くの非常勤講師をお願いすることになりました。また、場合によっては、人気のある授業は同じ授業を2回やっています。これも現時点では仕方がないところです。大学院ができるときにその辺は人数を増やそうかなとは思っていますが、4年間は動きがとれない状況ですから、何としても非常勤でもって対処せざるを得ません。

2点目は、先ほど申し上げましたように、私どもは大体大学院の修士課程は出てほしいと考えております。学部カリキュラムはそのつもりでつくっています。ですから、3、4年の専門とありますけれども、これは専門の基礎であって、おそらくそれだけでは社会に十分通用しない。ですから、積極的に大学院に行くように進める予定です。

質問 臨時の定員はもう済んだんですか。

相磯 来年は50人増やして正規に450人ずつということ。トータル900人です。これから飛び出さないようにしたいと思っていますが、歩どまりの予測は難しく、ほんとうに困っているんです。

質問 1回目はできないですね。2回目はまだ

……。1回目は難しいですね。

相磯 そうだと思いますね。

でも、最近は、中身がわかってきたということもあって、どうも人気は増えているような感じなんです。予備校に聞くと一番よくわかるんです。

質問 予備校に聞けば歩どまりもわかりますよ。

相磯 そのようですが、最初から欠員になったら困るので、とりすぎの方向に行ってしまったようです。

質問 ほんとうにすばらしいお話をありがとうございました。

外国人の先生、外国語、少なくとも1つは徹底的にというお話ですが、外国人のといえますか、特にイングリッシュのネイティブの先生だったら、どのくらいお考えですか。

相磯 既に専任として英語、ドイツ語、フランス語、朝鮮語、中国語の先生がおられますが、3年契約のスタッフと完全に専任としてのスタッフがいます。

質問 将来はインターナショナルな学校になる。

相磯 英語には強い学生が多く、20～30%の学生は英語の授業でも大丈夫と見ています。ですから、英語の授業も歓迎しています。いずれ外国人による外国語の専門教育が始まるのではと期待しています。この辺から国際化が進むのではないかと思います。

司会 よろしければ、時間も来たようですから、この辺で終わらせていただきます。ほんとうにありがとうございました。(拍手)

説明資料：1

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス
概況

1990年10月
慶應義塾大学

- I 所在地
神奈川県藤沢市遠藤5322
- II 開設 1990年4月
- III 交通機関
①小田急藤沢・江ノ島線「湘南台駅」下車、
バスにて15分
②東海道線「辻堂駅」下車、バスにて25分
- IV 校地面積 約33万㎡
- V 設置学部 総合政策学部(学部長：加藤 寛)
環境情報学部(学部長：相磯秀夫)
- VI 学生数(1990年10月1日現在)
総合政策学部 564名(うち、女子139名)
環境情報学部 591名(うち、女子191名)
合計 1,155名(うち、女子330名)
- VII 教職員数(フルタイム)(1990年10月1日現在)
- | | | |
|----|-----------|-----|
| 教員 | 教授 | 28名 |
| | 助教授 | 23名 |
| | 専任講師 | 5名 |
| | 助手 | 10名 |
| | 訪問講師(外国人) | 9名 |
| 教員 | 計 | 75名 |
| 職員 | | 26名 |

附：初年度入試結果(一般入試)

	募集人員	応募者	合格者	入学者
総合	400名	7,934名	916名	497名
環境	400名	9,017名	944名	524名
合計	800名	16,951名	1,860名	1,021名

注記：上記のほかに、内部進学者とAO(アドミッション・オフィス)入試による入学者がある。

説明資料：2

湘南藤沢キャンパスにおける
教育の新しい試み

1990年10月
慶應義塾大学

- I 諸科学横断的なアプローチによる
総合政策学、環境情報学の新構築
- II 学期制度・入学制度
◎ セメスター制度
◎ 入学時期(4月、9月)
◎ 入試制度(AO入試を中心とする)
- III カリキュラムと授業方法
◎ 有機的カリキュラム構成
◎ 授業担当者による研究会
◎ 授業シラバスの作成
◎ 時間割りと補講制度
◎ 学生による授業評価
- IV 自然言語の教育
◎ インテンシブ・トレーニング
◎ 語種選択期間とオリエンテーション
◎ アジア言語の重視
- V 人工言語の教育
◎ 湘南藤沢キャンパスのCNS
◎ 情報処理教育の特色
◎ ラップトップ・コンピュータによる教育
- VI 大学生コミュニケーション・チャネル
◎ アドバイザリー・グループ
◎ フレッシュマン・キャンプ
◎ オフィス・アワー
◎ キャンパス・ライフ委員会
◎ 心身ウェルネス・センター

1991年 5 月31日

編集 日本工学アカデミー
発行

〒140 東京都品川区大井 1-49-15 TEL. 03-3777-2941
住友生命大井町ビル 8 F FAX. 03-3777-4941